
境界の奏詩

金鐘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界の奏詩

【Nコード】

N1657I

【作者名】

金鐘

【あらすじ】

厭きた世界、

新たな世界、

第二の人生を求め少女は世界と縁を断つ、

境（前書き）

創作意欲のまま書きました。

初投票ですので、誤字などあるかも・・・

境

ここの風は心地よい。

だけど実際はこの風も人間が作った「ビル」という異物に当たった風。

下にはみんなが小さく見える、そう、まるで蟻のように。

ここから落ちれば死ねるだろうか？

もうこんな世界はいやだ。

この世界は腐ってる。

いつも、どこへ行っても。

世界のシンリ？そんな物はもとからない。

人は地に這いつくばり、鳥は天空を飛び交い、魚は水を体とする。

人にはできぬ事を鳥や魚はやってのける。

人間は自分たちが知能があるというが、なぜ殺しあう？

そもそもそれが本能ではないのか？

世間はそれを拒む。

「ニンゲン」という種でありながらその本能を拒絶する。

それは自分たちが「ニンゲン」という種を拒絶しているのと同じ事だ。

自分で自分を殺しているも同然。

人間じゃなくて鳥や魚に生まれたかった。

自然のまま生きれる生物。

生物の底辺、人間。

生物からも除外してもいいのではないか？

人間ほど醜くて貪欲なものはいない。

世間に善を唱える者はみな偽善者、自分たちの願望があるだろう？

それがない者は人はではない、それこそが生物だ。

世界の醜さはひどい、

だが、人が世界を腐らせたのか？それとも世界が人を腐らせたのか？
きっと違う世界なら人は綺麗な者のはずだ。

・・・歌が聞こえる。

綺麗な声だ。

この世界にはきつといない、清き者の声。
会いたい。

もうこんな世界に未練は残っていない。

きつと飛べる。羽はないけど飛べる気がする。。

きつとどこまでも、さようなら。

ぼくはそう思つて、飛んだ。

下からビルを伝つて聞こえる親や友人の声。

別に嫌な奴らじゃなかった。

もう会えないのは寂しい。

それから意識はない。

きつと死んだんだろう。

・・・じゃあなぜこんな事が考えれる？

僕はまだ生きているのか？

もう、いいんだ。

その時、自然と瞼が開いた。

周りは透き通つた神秘的な水で溢れていた。

よく見れば水面の上を立っていた。

まるで夢の様だ。

もしかして、ここが「天国」という所だろうか？

「綺麗・・・」

思わず口にしてしまった。

「そうでしょう？」

とつさに聞こえたその声は、美しい声だった。

その声の主は後ろにいた。

気がつかなかった。

なにやら綺麗な服装の女だった。もしかしたらあの歌を歌っていた人かもしれない。

「・・・あなたは？」

「私ですか・・・そうですね、今は『ヤカ』とでも名乗っておきましょう。」

不思議な名前だ。もしかすると天国ではこういう名前なんだろうか？

「僕は死んだのですか？」

「ええ。」

やはり、あの高さから落ちれば死ぬだろう。

「ここは・・・天国という所ですか？」

確認のため一応聞いておこう。

「確かに似ていますが違います。ここは『境』という所です。」

『境』なんだろう？

「ここは別の世界へ魂を送る場所、そして世界の境界線であるのです。」

「別の世界？」

夢にも思わなかった事だ。まあ、こんな場所があるのだ、別にあってもおかしくはない。

「そう、そしてあなたはその世界に送られ第二の人生をおくれます。」

「

僕が？」

第二の人生、この言葉は気にかかる。

「なぜ僕が？」

「なぜって、あなたがそれを望んだからでしょう？」

確かに僕は望んだがそういう意味ではないんだけど・・・

「何をすればいいの？」

「それは行けば分かりますよ？」

ヤカは笑って答えた。

「あ、そうそう。」

ヤカは何か思い出したように言った。

「あっちの世界に行ったら水面をみて『ヤカ』と呼んでみてください。」

水面でどうしろというのだ。

さっぱりわからん。

その時、

急に足元の水に穴が開いた。

「うわぁっ！」

僕の体はどんどん落ちて行った。

「頑張ってくださいねえ。」

小さかったがヤカの声が聞こえた。

そして暗黒の沈黙。

こんなに暗くて怖いはずなのに、なぜか安心感があった。
少し、寝よう。

境（後書き）

次作製作中	・	・	・	・	・	・
他作も製作中	・	・	・	・	・	・

鬼影

熱い……ここは……どこ？

意識がハッキリしていた。

周りは焼け野原だ、たぶん……地獄かな？

うつすら遠くに人影が見える。

見えづらい……

行ってみよう。

次第に見えてきた。

二人いる。

片方の人は地面に額をつけて叫んでいる。

女性のような、遠くから見える。

もう片方は……大きい。

初めて見るほど大きい人だ。

ぼやけてよく見えない。

なにかあったのだろうか？

小走りで近寄った。

近寄ってみたものの、大男の顔はよく見えない。

「どうかしたんですか？」

女性はこちらに気づいたようだ。

「なにをしているの！？逃げて！」

「え……」

その時、

大男がこちらを振り返った。

「あ……あ……」

鬼だ。

人とは思えぬほどの形相、

まるで激怒したかのように大きく皺が見える。

そして何よりも人にはない角。

額の辺りに二本、獣のように生えている。

・・・・・・殺される。

本能だろうか？

すぐにわかった。

大男、いや、鬼はこちらを見たたん歩いてきた。

「やめて！」

女性が僕の前で腕を開いた。

とたんに鬼は女性の上半身はある腕で女性を殴り飛ばした。

宙を舞う、無残。

一言。

地面に落ちた。

「逃げて・・・・・・」

女性の悲痛の叫びに聞こえ。

そして、鬼はまたこちらを見て歩き始めた。

死ぬ前に、一度だけ感じたことのある恐怖、

それ以上の感覚が僕を襲った。

足が・・・・・・動かない。

死ぬのか？二度目の死か？

時間が止まったように見えた。

鬼がゆつくりと腕を振りかざす。

死にたくない。死にたくない。

ヤコの言ったことが真実であればまだ人生はあるはず。

僕の顔面に当たる瞬間、

「うわああああ！」

初めて大声で叫んだ。

・・・・・・あれ？

痛くない。

瞼を開けた。

鬼の腕が黒い影に捕まっていた。

その影は僕の足元から出てきた。

「なに・・・これ・・・」

鬼は影を振り払い、そして背中を向け歩いていった。
その時気づいた。

ここの太陽は今、鬼の方向に昇っている。

だが今さっきの影は鬼のほうに伸びていた、

つまり太陽の光に逆らって出ていたことになる。

試しに後ろを振り返っても焼け野原だけ、

太陽、星すらない。

自分の影はいつもの通り太陽に従っている。

「う・・・うう・・・」

女性の声だ。

駆け寄ったろうとした瞬間、光がまわりを包んだ。
また意識がなくなった。

鬼影（後書き）

書き終え↓投票！！

他作も書いているから時間が掛かったかな？

老夫婦

冷たい、

そしてシャワーより優しい水が降り注ぐ。
気がついた。

「ここは・・・・・・・・？」

周りを見渡したところ小さな滝だ。

服がない・・・・・・・・

記憶がわからない、よく思い出せない。

まあいい、どうせ誰でもいい。

それよりさっきの鬼といい影といい・・・・・・・・

いったいどうなっているんだ？

女性がどうなっていたのか気になる、

そんな事を考えているとき。

「哭様、お時間でございます。」

突然、男の声が聞こえた。

「えっ・・・・・・・・」

どうしよう？

哭様？

だれ？

返事をしようとした瞬間、石から滑ってこけてしまった。

静寂の中に響く水の音。

「どうかなさいましたか！？」

驚いたのか、男性は岩の壁から顔を出した。

「あ・・・・・・・・しっ・・・・・・・・失礼しました！」

どうやら僕の体を見て驚いたようだ。

すぐに背を向けた。

まあ、裸なのだ。

当然の反応だ。

不思議だ。

急に体は小さくなり、白く、そして美しい……
髪も伸びた。

だけど昔から自分の体だった気がする。

「あの……」

「はい？何か御用でしょうか？」

男は背を向けたままだ。

「僕は誰？」

「えっ？」

そして男はまたこちらを振り返った。

「……まずは服を着ましょう。」

「……うん。」

男は壁の向こうから服を持ってきた。

初めて見る服だ、

様々な装飾が施されている。

綺麗だ、だがあの「境」という所のほうがよっぽど綺麗だ。

こんな物ただの飾りつけ、自分を偽っている。

着る気にはなれなかったが服はこれだけかもしれない、

とにかく着よう。

着てみたところ少し重い、

「さあ、御用があるのならあちらで……」

男が向いた方は壁の向こう、

見てみたい、壁の向こうを。

後一步のところで足が止まった。

壁の向こうを見てはいけない。

見たら全て失ってしまう。

そんな気がした。

今更何を迷う？自殺までして居たくなかったあの世界、

失ってもいい、むしろ失ったほうがいいんだ。

腐った部分は切り捨てなきゃ。

そう思つて一步を踏み出した。

頭の中が何かを過ぎつた。

あの世界で、過ぎした時、記憶が一気に見えた。

親、親族、友達、周りの人間達、

みんな、みんな金目当てで見てた。

僕が祖父と祖母の遺書で全ての遺産の権利は僕に残す。

と書いてあつたのきつかけにみんながちやほやしてきた。

今まで痛みしか与えなかつた親がやっとマトモな料理を食べさせてくれた。

親族も一緒だ。

そして友達、いやただのハイエナは僕にばかり始めた。

周りの人間も急に愛想良くなつた。

ただの偽り、キモチワルい。

同じ人間だと言っただけで吐き気がする。

まあ、奴らも生きるために金が欲しいだけ、

悪ではないのだ。

まともに接してくれたのは祖父と祖母だけだった。

いつも僕を楽しませてくれる話をしてくれた。

どれも嘘のようだが僕は嘘じゃないと思う。

もう一度会いたいな。

頭の中、何か見える、

あれは・・・なんの光だろう？

頭の中、一閃の光に飲まれた。

ああ、

隣いる、

暖かい手、

皺まみれの顔、

派手さもない渋い服、

杖を突く老夫婦。

目の前にあるのは僕たち三人の秘密の場所。

大樹の前、
異常に巨大な樹木だ。
二人は僕を見て笑った。
手を離れた。
後ろの暗闇に吸い込まれた。
それで終わり。
後は覚えていない。

老夫婦（後書き）

え、

最近、様々な人たちの作品を見たりしています。

どうも、間に空白が多いですね？

僕のはないのですが、読みやすいですか？

もし、読みにくいのであれば感想をお願いします。

それにより改善していきますのでご協力よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1657i/>

境界の奏詩

2010年12月12日03時29分発行